

『絵馬に託す願い』

東北海道現代俳句協会事務局長 鮎橋 郁香

東北海道現代俳句協会会報

第21号令和8年1月20日

東北海道現代俳句協会
発行人 石川 青狼
編集人 斉藤 郁子

新年明けましておめでとうございます。

昨年の巳年とはイメージが一変し、今年は躍動的な午年となりました。馬は力強く前進する「努力・発展」の象徴であり「豊穰・自由・光」を意味する一方で、「臆病だが人懐こい」という面もあります。そのため競走馬や農耕馬として人間に親しまれているので、あやかつて「人馬一体」となり一層の飛躍を目指したいところです。

昨年は六月に第三十四回北海道現代俳句大会が八年振りに当地で開催、八月には第十回東北海道現代俳句協会賞の募集（選考・十一月）、九月から合同句集「東北海道現代俳句第七集」の編纂（八年四月発行）という大きな行事が続きました。また十月にはくしろ元町青年団・日本伝統俳句協会北海道支部との共催で星野高士・現俳副会長が来釧されてのフットパス句会が開催されるなど、全て会員の皆様のご理解ご協力のもと大過なく終えることができましたことに深く感謝を申し上げます。

その中でも、第十回協会賞に於いて清水健志さんが三回振りの正賞を射止めたのは誠に嬉しい出来事でした。

そのほか、一昨年から開催の初心者俳句教室「土曜俳会」の受講者を始め他地区に在住の会員が当地区会員として登録してくださり、昨年末の会員数は四十二名に増えました。この爽やかな風にも大いに期待をしています。

さて今年はと言いますと、一月に釧路町社会福祉協議会様ご依頼の俳句講座を開催、四月は第三十六回定時総会並びに第三十五回東北海道現代俳句大会の同日開催、そして月例の行事が連なります。いずれも恙なく実施できますよう、引き続き会員皆様のご協力を賜りたくお願い申し上げます。

新たな年の始まりに際し思うことは、良い意味で「馬耳東風」となり、「毛を見て馬を相す」ことなく、皆さまと一緒に、千里は無理でも一年を無事に走り抜きたいと考えております。

皆様のご健康とご健吟を心よりお祈りいたします。

第23回 大とかち俳句賞全国俳句大会

9月20日(土) 帯広 とかちプラザ

●課題句「根」 投句数六六八句

◎日本伝統俳句協会北海道支部賞

☆石川青狼、信藤詔子、辰巳奈優美特選

大根干すわたしのシユールレアリスム 村川三津子

◎東北北海道現代俳句協会賞

☆粥川青猿、信藤詔子特選

屋根の雪下ろしひとりで生きてゆく 青山 酔鳴

◎優秀賞 ☆宮坂静生、高橋千草特選

試着室の鏡がきれい雪根開き 菅原 釈子

◎同 ☆十河宣洋、田湯岬特選

木の根開く閉まったままの老舗の戸 粥川 青猿

☆宮坂静生特選

根の國の根を腐すかの溽暑なり 青山 酔鳴

☆荒船青嶺特選

日高嶺の風を束ねて大根干す 伊藤 やす

大根を吊るせば昭和の空がある 粥川 青猿

☆桂せい久特選

鳥帰る番屋の屋根のごろた石 粥川 青猿

☆信藤詔子特選

きたぐにの屋根のかたち雪積もる

伊藤 やす

☆都賀由美子特選

鉄壁や羽根なき蟻の出入口

清水 健志

●雑詠句 投句数七八〇句

◎優秀賞 ☆石川青狼、橋本喜夫特選

乱鴉なり貌からやせる海霧のまち

鮎橋 郁香

◎同 ☆佐藤宣子特選

明日は発つ大白鳥の首・首・首

粥川 青猿

◎同 ☆橋本喜夫特選

鳴くな郭公葬りの飯が白すぎる

粥川 青猿

☆宮坂静生特選

火傷して飛び跳ねてゐるあめんぼう

よしぎね弓

☆中原道夫特選

麦秋の消失点をどこに置く

小飼 紫香

☆石川青狼特選

鳥と蝉ダイベート熱く夏木立

千 寿 姫

☆瀬戸優理子特選

ソフトクリーム舐めて世界を立て直す

菅原 釈子

☆辰巳奈優美特選

海明や国境線の溶け出しして

よしぎね弓

第23回大とかち俳句賞全国俳句大会 会員抄

根性の万歩の杖や夏帽子	中島 土方
大洋に行きつく未来根無草	中村きみどり
根治には致らぬ肢体根なし草	早川千鶴子
面差しは田舎者が良き夏大根	斉藤 郁子
その昔火薬拔根豊の秋	寺田 保子
はたた神根の国すらも慄けり	三品 史紀
露の臺母は双手に歳重ね	松原 静子
仏衣着る袖に入り込む薄暑かな	金野 克典
星涼しヒトコブラクダの座りだこ	西村 奈津
郭公が時機の間合いの鍵を解く	江波戸 明
遠くから夏草となりじつと見る	石井ゆかり
ルピナスの五彩残せる離農かな	荒川 美恵
韋駄天の姉ちゃんアイス解けちやうぞ	石川 青狼

大とかち俳句賞全国俳句大会に参加して

第23回「大とかち俳句賞全国俳句大会」(九月二十日)に、釧路から石川青狼会長始め六名が参加した。帯広到着時に頭を過つたのは天候のこと。果たして、松王かをり氏の講演「鶏頭の残像と幻像―子規忌に因んで―」の直後の興奮を一気に現実に戻したのは、JR運休のネットニュースであった。何とか一便早い列車に変更し、無事釧路駅に到着した時は心底安堵した。全国の秀句の数々に出会い、志を同じくする人達との交流も大きな収穫であった。

西村 奈津

第77回 釧路市芸術祭市民俳句大会

十月十九日(日) 釧路市中央図書館、投句数74句

(関係分)

二位	余生とて探る伸び代地虫鳴く	山田美智子
五位	朝刊にあらたな昨日秋深む	菅原 釈子
六位	いわし雲嘘ある様なない様な	村川三津子
九位	天高し愉快爽快登山会	千 寿 姫
十位	アナログとデジタル寄りて盆の膳	寺田 保子

第三回 くしろ元町フットパス句会

十月二十五日(土) 句会場…大成寺、投句数八十句

当協会及びくしろ元町青年団、日本伝統俳句協会の共同主催による第三回くしろ元町フットパス句会が十月二十五日、総勢四十名が集まり開催された。釧路臨港鉄道の跡地の自然や歴史を実際に歩きながら感じ、それを俳句に詠むもので、この日は「玉藻」主宰・現代俳句協会副会長の星野高士氏や日本伝統協会の安田豆作氏、桂せい久氏も参加され、句会と懇親会で晩秋の一日を楽しんだ。



(下) 懇親会、ゴキゲンです
(左) 講評する石川会長と
右は星野高士氏



句会結果

一位 旗持ちは若き神主秋高し

池亀由美子

二位 枯れ急ぐハマナス根つから海育ち

石川 青狼

三位 きらきらの波よぼくらの秋惜しむ

鮎橋 郁香

・星野高士特選

晩秋の岩礁とつておきの貌

石川 青狼

枯れ急ぐハマナス根つから海育ち

石川 青狼

・桂せい久特選

踏切の構えは上段秋澄めり

西村 奈津

・石川青狼特選

枯れるまで吸ひ尽くす意気秋の蜂

よしざね弓

会員抄

ランデブー待ちくたびれて秋の蝶

石井ゆかり

秋麗を大きくうつす虚子の句碑

菅原 釈子

本堂の庭に紅葉の小さな手

お ゆ う

秋風の輪郭纏い線路跡

小飼 紫香

先頭のかもめ追いこせ秋の蝶

清水 健志

秋の浜シーグラス2個手のひらに

中村 凡

昔日の面影残し暮れの秋

花 林 音

そう言えばこの町この海そぞろ寒

村川三津子

◆◆土曜俳会◆◆

俳句初心者を対象に始めた俳句講座を「土曜俳会」と改称して活動、受講会員が大会に入賞するなど成果が出てきた。また岡山県から来られた長期滞在の方も参加され、今は通信会員として参加している。

春の雲渚に集うヒドリガモ

柴野 美幸

来釧の一筆加える暑中見舞い

三原 美香

小樽運河「ポケふた」探し秋の暮

本橋小恵子

意を決し落ち葉のダイヴくるくるる

千寿 姫

薪くべてやかんしゅんしゅんかまど猫

石井ゆかり

冬近し飯寿司の樽を持ち出して

中村 凡

折鶴蘭茎が背伸びの冬日向

おゆ う

会員動向

現在会員数 42名 うち地区会員8名

入会 三品吏紀(帯広)、おゆう(釧路)

退会 北原白道(釧路)

※脇本文子、脇本千尋(札幌)

正会員から地区会員へ変更

第10回東北北海道現代俳句協会賞決定

正賞	「響 音」	清水 健志
準賞	「パートタイマー」	菅原 釈子
佳作賞	「帯を解く」	西村 奈津

授賞式は四月十九日、第三十六回総会席上にて行います。受賞された皆様おめでとうございます。

協会賞正賞を受賞して

清水 健志

「エッ? いいんですか?俺で:」石川会長から協会賞の受賞者に決まったことを告げられたとき不意に発していました。本音です。応募したあと自分の句を見直すこと相変わらずの似たような狭い句材ばかりだと思えました。それでもいま自分の持てる力は出し切った、これで受賞できないならしょうがない、本音です。それが選考委員の方々から望外の評価を頂いた。只々嬉しい。そして数年来愉しく句作を続けていられるのは会長を始めとした月例会会を共にする会員の皆さんのおかげです。これも又偽らざる思いです。皆さん、どうもありがとうございます。

釧路現代俳句会 月例会句会

7月例会

夕刻のどちらに避けたかめまとひよ 荒川 美恵
 陣痛のごとふんばる朱夏の米騒動 飯沼 風華
 蟬鳴いて捨てるつもりを持ち帰る 石井ゆかり
 不寐な闖入者青胡桃 花林 音
 五拍子のグルーブ生まれ青林檎 小飼 紫香
 弁当の昆布良妻のジレンマ 齊藤 郁子
 夏霞歴史を繋ぐ久寿里橋 坂下 裕子
 とりあえず手の平で切る冷奴 佐藤かよ子
 夏蝶を目で追いつつの立ち話 柴田 俊子
 六月のせせらぎ光る丸輪草 柴野 美幸
 湿原の風の祓いや山椒魚 清水 健志
 玫瑰や岬は舌のように果て 菅原 釈子
 夏晴れや緑の愛車空を飛ぶ 千寿 姫
 咲きたれば供花とし切らる花菖蒲 寺田 保子
 昼顔や麻酔に頬を盗まれて 中島 加奈
 蟻の目の見分けがつかぬ眼鏡買う 中村 きみどり
 暑き日に沓か零かのラブレター 中村 凡
 熱帯夜力点を失っている 西村 奈津
 表情は文法 という手話風薫る 芳賀 知子
 万博の口琴涼しいランカラプテ 早川 千鶴子
 狐らの猛き宴や夜半の夏 鮎橋 郁香
 ヌブカ里寝ころび探す夏の星 三原 美香
 寝ちがへし首もてあますはたた神 横地 妙子

炎天やオホツク海の煮込まれて 炎天やオホツク海の煮込まれて よしぎね弓
 沈黙をからから回すアイスティ 沈黙をからから回すアイスティ 吉野喜代子
 友だちでいようのんびり水饅頭 友だちでいようのんびり水饅頭 脇本 文子
 だんまりは肯定なのか氷菓食ふ だんまりは肯定なのか氷菓食ふ 脇本 千尋
 青蘆原饒舌に不機嫌に風 青蘆原饒舌に不機嫌に風 石川 青狼
 8月例会
 神興くる子らわつさらと飛むでくる 神興くる子らわつさらと飛むでくる 荒川 美恵
 デカ西瓜この世あの世と切り分ける デカ西瓜この世あの世と切り分ける 飯沼 風華
 蒸し暑し今日あたり蟻結婚飛行か 蒸し暑し今日あたり蟻結婚飛行か 石井ゆかり
 港祭り有終の美を飾る「そうや」 港祭り有終の美を飾る「そうや」 お ゆ う
 ショパン聴くホール渦巻くはたた神 ショパン聴くホール渦巻くはたた神 花林 音
 ここだけの話の謎や桃の種 ここだけの話の謎や桃の種 小飼 紫香
 ブツキーニ今日は佳き日やなにもなし ブツキーニ今日は佳き日やなにもなし 齊藤 郁子
 終戦記念日遺骨なき叔父沖繩の土 終戦記念日遺骨なき叔父沖繩の土 佐藤かよ子
 水道の蛇口にも居た極暑かな 水道の蛇口にも居た極暑かな 柴田 俊子
 夏の浜コンプ漁師の底力 夏の浜コンプ漁師の底力 柴野 美幸
 海底押競饅頭水馬 海底押競饅頭水馬 清水 健志
 生臭い海霧を光のすれ違う 生臭い海霧を光のすれ違う 菅原 釈子
 着陸をじつと待つ待つジリの中 着陸をじつと待つ待つジリの中 千寿 姫
 海霧岬鷗浮沈のこゑ淡し 海霧岬鷗浮沈のこゑ淡し 寺田 保子
 夏の月花瓶に乗せるヘアピース 夏の月花瓶に乗せるヘアピース 中島 加奈
 好奇心亀の子首の上下左右 好奇心亀の子首の上下左右 中村 きみどり
 八・六のコンチキショウや夏は来ぬ 八・六のコンチキショウや夏は来ぬ 中村 凡

八月のぼくの時計が慌ててる 八月のぼくの時計が慌ててる 西村 奈津
 留守の間の紫集め桔梗咲く 留守の間の紫集め桔梗咲く 芳賀 知子
 夏草の雄叫びあげて蔓延るよ 夏草の雄叫びあげて蔓延るよ 早川 千鶴子
 虎杖の焰ひろがれ昌美の忌 虎杖の焰ひろがれ昌美の忌 鮎橋 郁香
 雲の峰ピンクに輝る日が昇る 雲の峰ピンクに輝る日が昇る 三原 美香
 子離れの出来ぬあれこれ青鬼灯 子離れの出来ぬあれこれ青鬼灯 横地 妙子
 観光地なき駅前姫女苑 観光地なき駅前姫女苑 よしぎね弓
 威勢よく箸割る旅人市場夏 威勢よく箸割る旅人市場夏 吉野喜代子
 ジャズ晴れの街どこまでも夏帽子 ジャズ晴れの街どこまでも夏帽子 脇本 文子
 平積み都市伝説や夏の果て 平積み都市伝説や夏の果て 脇本 千尋
 終戦日を当世背負う誕生児 終戦日を当世背負う誕生児 石川 青狼
 9月例会
 花木榿昨夜の残滓を落としては 花木榿昨夜の残滓を落としては 荒川 美恵
 あれよあれよと秋刀魚食う子の残像 あれよあれよと秋刀魚食う子の残像 飯沼 風華
 盆の月昔話をもっと聞きたい 盆の月昔話をもっと聞きたい 石井ゆかり
 母逝けり庭の芙蓉も咲き終えて 母逝けり庭の芙蓉も咲き終えて お ゆ う
 乾杯に室温上がりし夏の果 乾杯に室温上がりし夏の果 花林 音
 ヤマボウシ実に薄情な秋の風 ヤマボウシ実に薄情な秋の風 小飼 紫香
 秋月や夜間病棟長い椅子 秋月や夜間病棟長い椅子 金野 克典
 新涼や菜きざむ音の時に乱 新涼や菜きざむ音の時に乱 齊藤 郁子
 大雨を物ともせず秋桜 大雨を物ともせず秋桜 佐藤かよ子
 謎めきし今年狭庭の虫時雨 謎めきし今年狭庭の虫時雨 柴田 俊子
 南瓜四つホームの庭で実りけり 南瓜四つホームの庭で実りけり 柴野 美幸

灰虹や壁の向こうが切れている
 ぼきと月光折つて鴉の眠るかな
 初秋や句句苦苦苦句の課題
 晩夏光スキヤットして湾の張り
 若冲の象とゆきたし花野かな
 鬼灯や灼熱地獄ひっそりと
 秋風よ夏の思い出つれゆくな
 路線図のごと走る静脈おけら鳴く
 空高し上の空でも生きられそう
 昭和史に銃後の言葉豊の秋
 出来心一気呵成に桃をむく
 秋近し寝起き布団の足見えず
 結葉やないしよの話ききもらす
 底紅や柔かな母の男文字
 鬱晴れて猫がハモニカ吹く月夜
 カラスたち点呼取り合う秋没日
 天の川氾濫となり村睡る

10 月例会

清水 健志
 菅原 釈子
 千 寿 姫
 寺田 保子
 中島 加奈
 中村きみどり
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川千鶴子
 鮎橋 郁香
 三原 美香
 横地 妙子
 吉野喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼
 荒川 美恵
 飯沼 風華
 石井ゆかり
 お ゆ う
 花 林 音
 小飼 紫香
 斉藤 郁子

大小のダリアの花束友のカフェ
 青空の木よりひらりと竜田姫
 臨鉄跡見守り役の小浜菊
 古酒酌むや兔の尻に月の砂
 わたくしの秋灯誰の星になる
 秋の旅引いていた手に引かれ行く
 臨席てふ一会のありぬ薄紅葉
 魂抜き終えて見知らぬ部屋となり
 鼻曲り釣れずに帰る人の群
 ふるさとのかくも悲しき三日月か
 塗り替えの屋根の出来栄え天高し
 栗おこわ今を生きてる人のため
 寛解の秋空を舞ふゴルフ球
 秋夕焼翅を落としたりのはだれ
 秋の暮れ並んで泳ぐくじら雲
 駅前六畳ほどの菊花展
 絮すでに野心みなぎる鬼薊
 嘘とホントで酌み交わそうかましら酒
 げいじつは月2個買ってお得です
 中秋の名月ずれてる団子

11 月例会

佐藤かよ子
 柴田 俊子
 柴野 美幸
 清水 健志
 菅原 釈子
 千 寿 姫
 寺田 保子
 中島 加奈
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川千鶴子
 鮎橋 郁香
 三原 美香
 よしざね弓
 吉野喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼
 荒川 美恵
 飯沼 風華
 石井ゆかり
 お ゆ う

つくつくと刺繍針さす文化の日
 山あひの郷を包むや冬の靄
 秋冷や今日からセルフネグレクト
 今年米バイブレイヤーの有精卵
 寒がりの私と猫のアイコンタクト
 鴉来てコンマ打ちたる夕紅葉
 海鳥の顔ぶれ変わる冬隣
 不一致のDNAや後の月
 梨食んで夜を水底だと思ふ
 京の雨吾唯足を知る秋ぞ
 秋望の「幸せの鐘」米寿の手
 木の実降る小熊満たして眠らせよ
 初雪を口で受け止め道産子は
 身に入むや啄木詩劇幕上がる
 冬隣はつきりしないうしろまえ
 紅葉は斯くあるべしと躑躅燃ゆ
 イテトリハビリの廊秋開ける
 流木の鬼蜘蛛めくや文化の日
 秋の海高く見えるは水平線
 ひと組はいざごさに見えいわし雲
 冬の月湖面はワックス掛けしごと
 物を乞ふ開目に宿し北狐
 仲直りする風待てば帰り花
 白黒と返してみても冬景色
 先頭は卑弥呼であるか雁の声

小飼 紫香
 花 林 音
 金野 克典
 斉藤 郁子
 佐藤かよ子
 柴田 俊子
 柴野 美幸
 清水 健志
 菅原 釈子
 千 寿 姫
 寺田 保子
 中島 加奈
 中村きみどり
 中村 凡
 西村 奈津
 芳賀 知子
 早川千鶴子
 鮎橋 郁香
 三原 美香
 村川三津子
 よしざね弓
 吉野喜代子
 脇本 文子
 脇本 千尋
 石川 青狼

12月例会

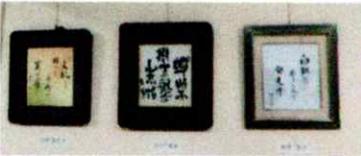
からからと枯葉かけゆく新天地	荒川 美恵
十二月八日旧姓の針箱に父母	飯沼 風華
ため息でバランスをとる春待つて	石井ゆかり
裸木や奪われる物無い強さ	お ゆ う
毛糸編む地震ニュースもなんのその	花 林 音
冬木立速写モデルになり裸形	小飼 紫香
鯛焼きの渡し館良い人の精一杯	斉藤 郁子
冬茜指切りげんまんまたあした	佐藤かよ子
冬の日やコンソメスープは難しい	柴田 俊子
船飾る橋の袂の年の市	柴野 美幸
極月や日銀本店四方に門	清水 健志
冬ごもり見ないで磨く口の中	菅原 积子
ザンボニー悔いも痛みもリセットに	千 寿 姫
貫禄の寒さ連れきて十二月	寺田 保子
付け爪の裏広々と十二月	中島 加奈
熊穴に入る寝つけない夜のポプリ	中村きみどり
荒巻や阿寒風の力借り	中村 凡
煮凝りや子に伝えたる死後のこと	西村 奈津
日曜の無人のバスと冬時雨	芳賀 知子
赤きセーター着前頭葉のなまけぐせ	早川千鶴子
すぐ曇る鏡の向きや開戦日	鮎橋 郁香
流行り風邪おろし林檎と赤い頬	三原 美香
世の黒寝る暇惜しみ今日もまた	よしざね弓
汽水湖の秋思いささかならぬ渦	吉野喜代子

◆墨書展◆

10月15日より1ヵ月間
於；プラザさいわい



墨書展 & 芸術祭



地獄坂とんとんゆけば小春風
今朝晴れてルロイ・アンダーソン『そりすべり』
枯どぐい地の果ての聲囁れ尽きる

脇本 文子
脇本 千尋
石川 青狼

◇芸術祭文学団体色紙展◇

10月14日(火)～19日(日)
於；市立図書館



～令和7年度 わたしの一句～

四季それぞれの皆様の思い出の一句をお楽しみください。

《春》

路線バス消えて蕨の太くなる
 クロツカスだれのためでもなく青く
 まだちよつと泣くには早い春の星
 わたしだけ画質が粗い春の風邪
 (だいじょうぶ)の魔法をかけて春シヨール

遺品みな陽炎の棲み処歯が痛い
 うららかや赤子のつむじ左巻き

《夏》

鈍行の柀席に入る青田風
 シヨパン聴くホール渦巻くはたた神
 幽霊を見ない一生西瓜喰む
 大洋に行きつく未来根無し草
 鉄鍋を呑む火厨はとうに朱夏

長嶋茂雄氏逝く

端居して二人の「茂雄」偲びけり

《秋》

底紅や柔かな母の男文字
 花木榿昨夜の残滓を落としては
 白百合の花束胸に母逝けり
 うんとこしょ大根抜けた秋の空
 臨鉄跡見守り役の小浜菊
 身に入むや啄木詩劇幕上がる

江波戸 明

芳賀 知子

脇本 千尋

菅原 釈子

脇本 文子

斉藤 郁子

横地 妙子

よしざね弓

花 林 音

中島 加奈

中村きみどり

三品 吏紀

柴田 俊子

吉野喜代子

荒川 美恵

お ゆ う

三原 美香

柴野 美幸

中村 凡

秋深し母の便りの行狭くだりせば

ここだけの話の謎や桃の種

秋の旅引いていた手に引かれ行く

路線図のごと走る静脈おけら鳴く

秋刀魚船浮かして消して移流霧

秋夕焼翅を落としたのはだれ

老ゆるほど恋ふる故郷盆の月

あれよあれよと秋刀魚食う子の残像

アナログとデジタル寄りて盆の膳

そりやあなた覚悟いでしよ十三夜

陽の温み地の温み浸む落葉道

杖もまた五体の一部今朝の秋

天井に雁が音父の座が濃くなる

天の川氾濫となり村睡る

《冬》

しかと知る優しき孤独 冬来たる

釧路くれない白鳥と丹頂と

空の青無垢の氷柱にある嫉妬

凍港へジュツと落ちゆく大夕日

屈性というらしい君芽吹き待ち

ほうけた人とほうけたように春を待つ

日向ぼこ少し壊れた人といる

裏口に火薬の匂い寒昂

青山 酔鳴

小飼 紫香

千 寿 姫

西村 奈津

中尾 克彦

鮎橋 郁香

伊藤 やす

飯沼 風華

寺田 保子

村川三津子

山田美智子

中島 土方

山本 勲

石川 青狼

金野 克典

清水 健志

早川千鶴子

吉田 洋子

石井ゆかり

佐藤かよ子

松原 静子

粥川 青猿

2025年《列島春秋》

一月	あかときの凍裂 <small>いちたかい</small> 一打 <small>いた</small> 峡 <small>かい</small> 奔る	伊藤 やす
二月	忘れ物取りに戻りし御神渡り	金野 克典
三月	愛犬と旅ゆく先の碎氷船	中尾 克彦
四月	湿原の脈打つ度を笹起きる	吉野喜代子
五月	正論は時に異端者蝦夷桜	西村 奈津
六月	海霧 <small>じり</small> に棲む灰白き闇見据えつつ	脇本 文子
七月	トーチカ <small>じり</small> の海霧へざらつく牛の舌	粥川 青猿
八月	遠花火まりも羊糞燥ぎだす	小飼 紫香
九月	初秋刀魚ざらりと喉へ寒流が	菅原 釈子
十月	白鳥来るコンパス持って測量士	中村きみどり
十一月	雪虫の青き吐息がぼつと過ぐ	荒川 美恵
十二月	ストーブの前かしこまる初点火	脇本 千尋

◇編集後記◇

新年明けましておめでとうございます。

昨年は六月に北海道現代俳句大会が釧路で開催され、第10回
北海道現代俳句協会賞、合同句集「北海道現代俳句 第7集」
発行準備と中身の濃い一年でした。様々な場面での皆様のご協
力に心から感謝いたします。ありがとうございました。

(齊藤)

◇◇ 行事予定 ◇◇

第36回北海道現代俳句協会定時総会

4月19日(日) 釧路市生涯学習センター6階601号室
合同句集「北海道現代俳句 第7集」発行

第31回北海道現代俳句大会

4月19日(日) 釧路市生涯学習センター6階601号室
トークセッション「鈴木八駈郎を語る」：石川青猿会長、粥川青猿副会長

第34回中北海道現代俳句大会 令和8年4月5日(日) 午後1時より かでの2・7

講演；豊川 容子氏 (アイヌシンガー、北海道道庁文学館評議員)
演題；未定

第35回北海道現代俳句大会 令和8年6月14日(日) 午後1時より

旭川トーヨーホテル
講演；家藤 正人氏
演題；未定